

JALグループ機内誌 [スカイワード]

INTERNATIONAL
EDITION

SKYWARD

2025

11

November

モザイクおどる街 フランスレンヌ

出雲
神々の集う季節



JAPAN AIRLINES



APEX WORLD CLASS

The Inflight Magazine of the JAL Group

ご搭乗のお客さまはご自由にお持ち帰りください。

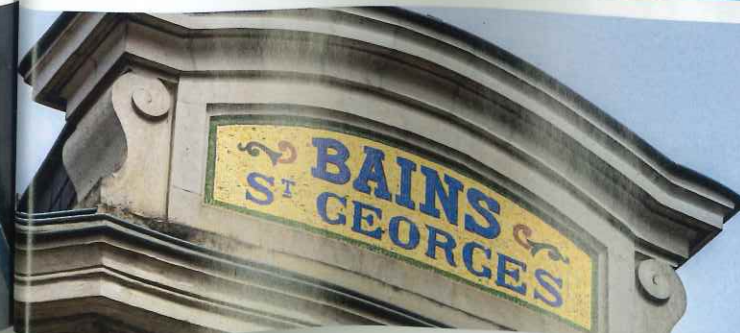
Take a look inside for more interesting articles in English and Chinese.
更多有趣的中英文版文章在里面对您开放。

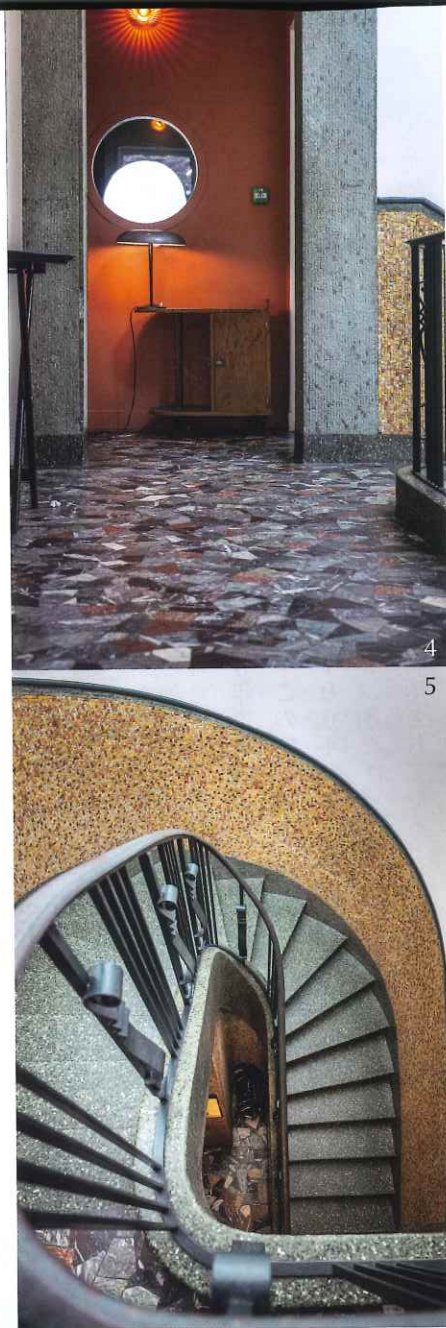
モザイクおどる街

FRANCE RENNES

フランス北西部ブルターニュ地方の都市、レンヌ。
中世から続く木組みの街並みにさりげなく混ざり、
小さなきらめきを建物に添える役者がいる。
19世紀後半からこの地に根付き、
さまざまな生活空間を彩ってきたモザイクの美を探ねて。

文／鈴木春恵 撮影／武田正彦



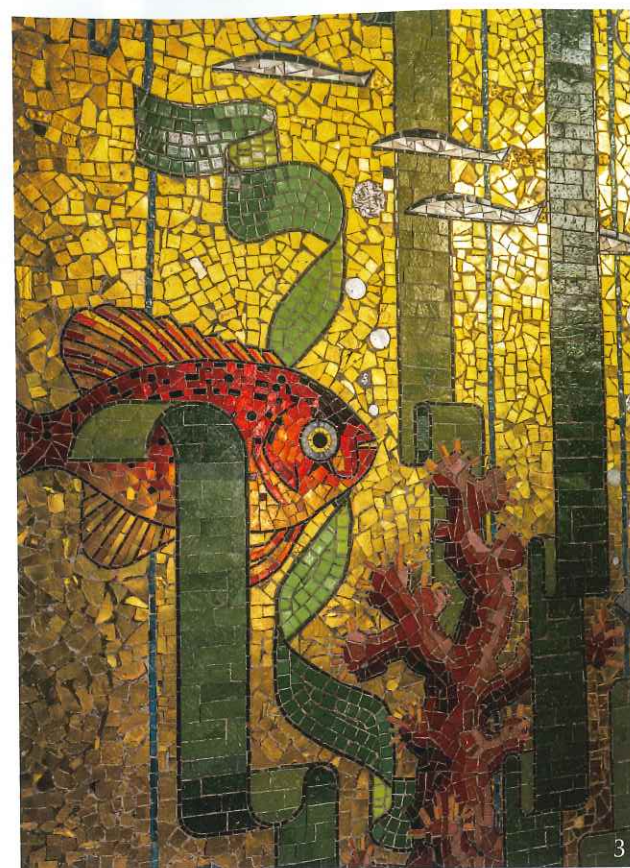


ブルトン

7 Rue Joseph Sauveur, Rennes

bretonne_rennes

3.現在クレープレストランになっている旧オドリコ邸のモザイク。特に代表的なこの作品はかつての浴室の壁に施されている。4.5.壁、階段、床までもが石やガラスの小片で作るモザイク。6.そば粉を使ったクレープ(ガレット)はバリエーション豊かでボリューム満点。7.外観。8.美空間でご当地名物を満喫。



FRANCE RENNES

参加した。オペラ座完成後、彼らは故郷には戻らずフランスに移住。1882年、ここレンヌに「オドリコ兄弟社」を設立した。それから20世紀前半にかけて、オドリコ一家はレンヌを拠点に北西フランス全域を舞台にしてモザイク制作を展開してゆくことになる。

ジョゼフ・ソヴール通り7番地には、オドリコ家の邸宅がいまも残る。足元の舗道からすでにモザイク装飾が施されているその館は、いわば一家の作品のショーケース。建物は現在、一棟丸ごとレストラン「ブルトン」として再生され、地元の人たちの和気あいあいとした空気に触れながら、ブルターニュ名物のクレープとシードルを堪能できる場所になっている。



『モザイクを探して街を歩く』

世界遺産のモン・サン・ミッシェルを訪れた方は、この街の名前を聞いたことがあるかもしれない。レンヌはブルターニュ地方の中心都市。ここを起点に旅を組み立てたかもしれないし、中世の風情を残したこの街の風景をしばし楽しんだかもしれない。今回の私たちの旅のテーマはモザイク。フランスに詳しい方でもレンヌがモザイクで有名とは初耳、という方も多いのではないだろうか。

パリ・モンパルナス駅からTGV(高速鉄道)で西へ向かう。車を使うとなかなかの距離に思えるが、高速鉄道ならばレンヌは約1時間半後の停車駅。拍子抜けするほど近い。宿で旅装を解き、気ままに散歩するくらいの気持ちで歩きます。するとこの街の見所が次々に視界に入ってくる。どこか



1.ボワリエ・ビルの装飾。1930年代の都市計画を象徴する。
2.ビルの1階には地元の手仕事を集めたショップがある。

物語めいた木組みの家々が並ぶ界限。洒落たカフェレストランが連なる石畳の小道……。ヒューマンスケールというのだろうか、気負わず、ゆったりとした心持ちで歩ける雰囲気がこの街にはある。

ジャン・ジャンヴィエ大通りのほうへ向かうと、きらきらと太陽の光を反射させている建物が目に入ってくる。近づいてみると、まるで惑星が踊っているような模様が浮かび上がり、さまざまな階調の金色のピースがびっしりと施されていることにしばし見惚れてしまう。建物の名前は「ボワリエ・ビル」。レンヌのモザイク巡りのスタートを飾る建築遺産だ。手がけたのはオドリコという職人一家。私たち日本人としては「踊り子」を連想してしまうが、もちろんそうではなく、イタリアから渡ってきた一家の名前だ。

時は19世紀後半、イタリア・フリウリ地方の小さな村からやってきたオドリコ兄弟は、同郷の職人たちと一緒にパリ・オペラ座のモザイク制作に

人々に愛される用の美

食事をしながらモザイク鑑賞できるのがブルトンだとして、「サン＝ジョルジュ市民プール」は泳ぎながらモザイクに触れられる場所。緩やかにスイングするモザイクの波がちょうどスイマーの目の高さで寄り添うように設計されている。プールが誕生したのは1926年。来年100周年を迎える。100年前のフランスでは、快適さと衛生をもたらす都市政策の一環として各地で市民プールが造られた。先のボワリエ・ビルがある大通りの名前にもなった当時のレンヌ市長は、さらに明確なビジョンを持っていた。「人々をこのプールに呼び込むため、美しく飾る必要がある。将来この建物は必ずや歴史的建造物に指定されるだろう。ブルターニュ高等法院やサン＝ピエール大聖堂のように」。

サン＝ジョルジュ市民プール

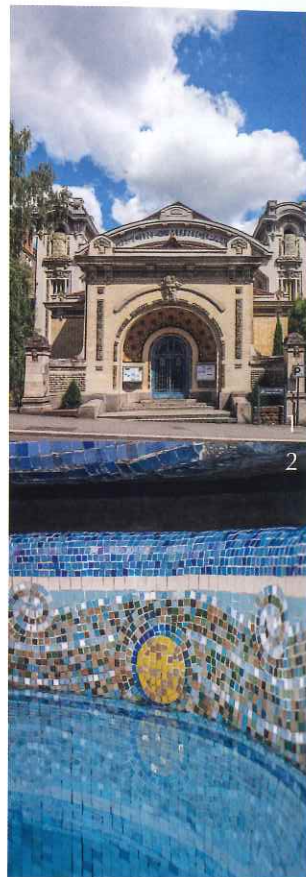
2 Rue Gambetta, Rennes

1.水をイメージした装飾が目立つ正面玄関。2.配色、デザインともに個性が感じられるモザイク。3.長らく現役で利用されてきた市民プールは、2028年から30年にかけて、天井部分を創建時の状態に戻す大修復が予定されている。

プールがレンヌの史跡と同等の名所になるという市長の先見の明は、2016年に見事に現実のものとなった。このプールが素晴らしいのは、100年前の美しさをいまに伝えているだけでなく、ずっと現役で利用されているところ。モザイクには装飾性に加え、清潔で手入れがしやすいという利点があり、まさに時代の要求に適った用の美だったのだ。

入り口のアーチ部分のモザイクはパリの工房によるものだが、プ

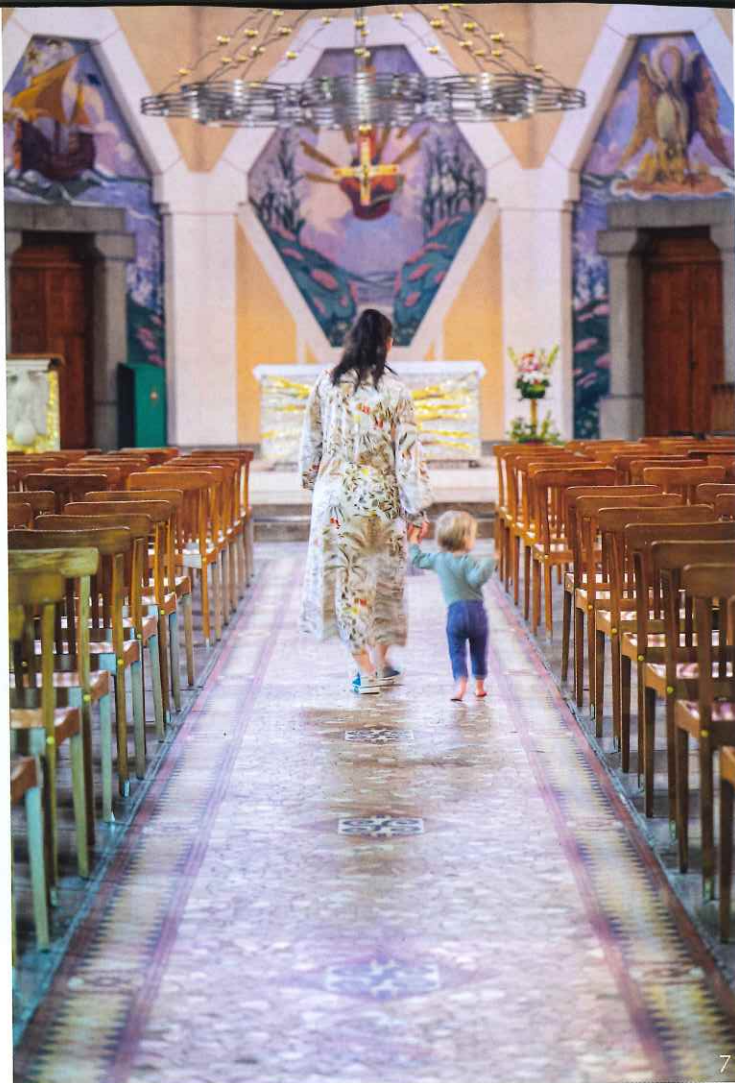
FRANCE
RENNES



サン＝テレーズ教会

18 Rue Sully Prudhomme, Rennes

4.洗礼室の床や壁にも精緻なモザイクが施されている。5.創建は1936年。石材と鉄筋コンクリートを用いた堅牢な外観の内側には、当時の職人たちの多彩な仕事が残っている。6.7.アール・デコ様式を体現した床の装飾が印象的。オドリコ家第2世代の作品。

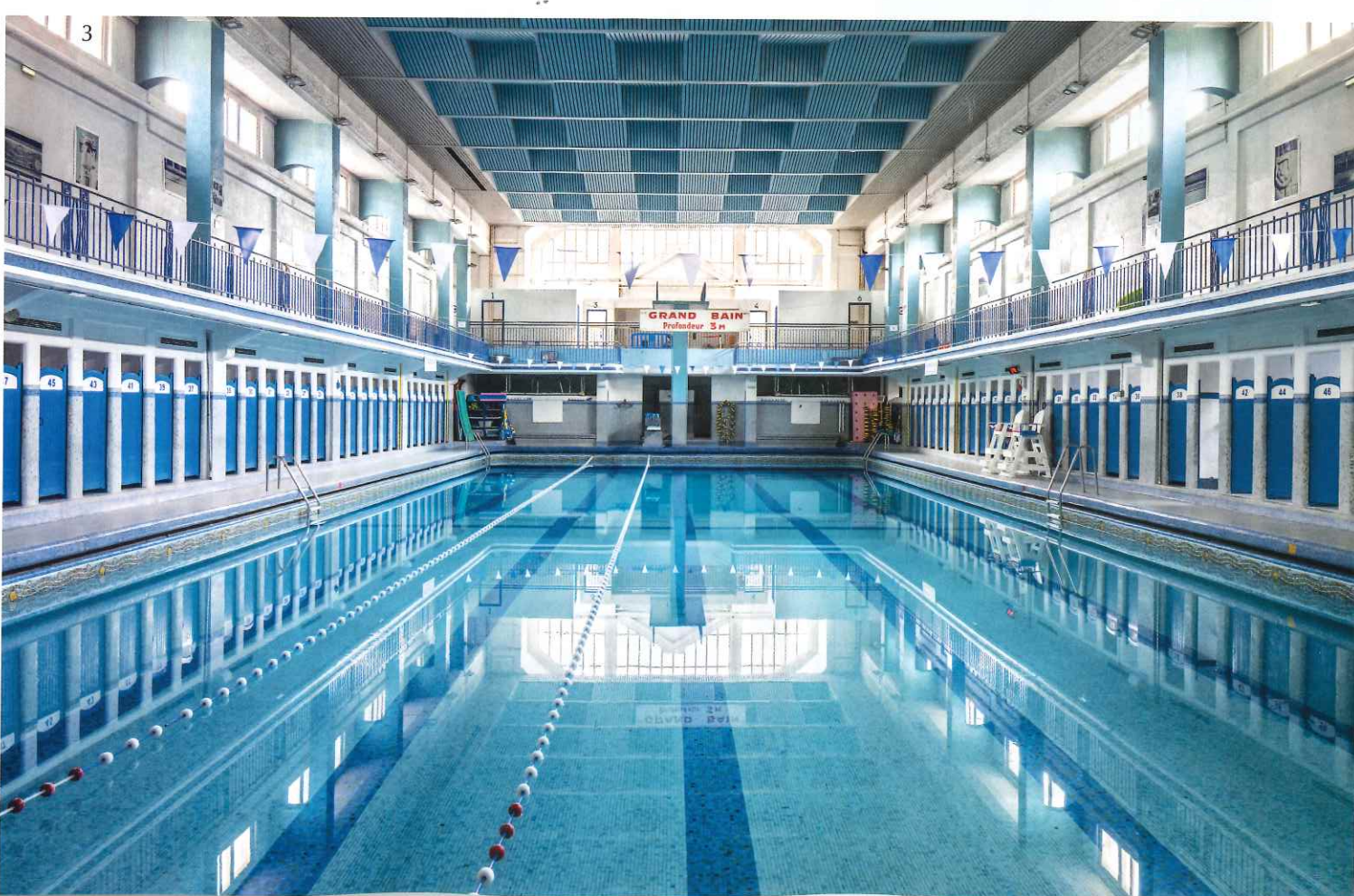


ール本体の大規模な装飾は地元のアドリコ工房が担当している。プールを取り囲む1階部分は更衣室、2階部分からは水泳、水球競技が観戦できた。壁にはこのプールで撮影されたモノクロ写真が掲げられていて、眺めていると、ここにこだました歓声や笑い声が蘇ってくるような気がする。

ボワリエ・ビル、ブルトン、市民プール、さらには郊外のサン＝テレーズ教会まで、現存する多くのモザイク作品はオドリコ家第2世代の時代のものだ。第2世代、特にイシドール・オドリコの人生がとても興味深い。彼はレンヌの美術学校に学んだ。だが第一次世界大戦で従軍し、ドイツ軍の捕虜として拘束されてしまう。終戦後に家業に加わることになるのは、美術の基礎に加えて、当時最先端だったウィーン分離派などの芸術活動から影響を受けて帰郷したことが大きい。時はアール・デコの時代。その波に乗って、彼は兄と共に大いに会社を発展させてゆく。それだけではない。なんと彼はサッカー選手としても有名だった。地元チームで活躍し、さらには指導者として外国人選手の獲得にも乗り出し、プロサッカーリーグ発足と同時にレンヌのチームの会長に就任。市民からは「ドドル」の愛称で親しまれたのだという。



8.アントラン通りにある第1世代の作品。かつての食品店を飾ったもので、最上階のアーチのある外壁がその遺構。





ラ・クリエ中央市場

Place Honoré de Commeureuc, Rennes

lacrieemarchecentral

4.屋根付きの常設市場の目印もモザイク。
5.市場には新鮮な食のスタンドがずらり。
6.レンヌ市民のソウルフード「ガレット・ソシス」。市場近くのクレープ店や土曜のリス広場の朝市でも味わえる。7.8.バターとチーズで有名な「メゾン・ボルディエ」の地元だけに、できたてバターも買える。



FRANCE RENNES



9.サン＝ミシェル広場、かつて薬局だった店舗のファサード。10.モザイク作家カロリーヌさん。レンヌ市内にアトリエを構え、遺産修復と自身の創作を両立。次世代へモザイクを伝える活動をしている。



1.シャン・ジャケ広場の景観。2.ホテル「ママシェルター」の現代モザイク作品。3.ブティック「フランスール」。およそ100年前のオドリコ作品が健在。

《いまに生き続けるモザイク》

レンヌ観光局は「オドリコとモザイク芸術の行程」と題したパンフレットを作っていて、27の場所が記してある。かつての薬局はレストラン、鮮魚店は電子タバコの店、写真家のアトリエが洋服のブティックなど、持ち主や業態は変わっているのだが、モザイクの床や壁は健在。宝探しをするような気分です。私たちがお店の方々が快く迎えてくれるところに、この街の人々の優しさをを感じる。看板がモザイクになっている中央市場では、豊かなブルターニュの食の恵みにさらに目を見開き、旅土産を選ぶ楽しみも待っている。

私たちはガイドツアーに参加したのだが、旧オドリコ邸の話がとても印象的だった。建物がレストランになる前、ここに暮らしていたマダムはガイドのジルさんに次のように語ったという。「この家を購入したのは1970年代末から80年代初めの頃です。契約の時、公証人に『中には古いタイルがた





JALがお届けする ボジョレー・ヌーヴォー

11月の第3木曜日は、フランスの秋の風物詩である新酒「ボジョレー・ヌーヴォー」の解禁日。JALは1983年の初輸送以来、2020～2022年のコロナ禍でも輸送を続け、日仏友好の絆をつないできました。JALは今年も、5代にわたりボジョレーのテロワールを表現し続けてきた名手ピエール・フェロー社のボジョレー・ヌーヴォーを、皆さまにお届け。『JALショッピング JAL Mall店』などからお買い求めいただけます。

※20歳未満の方の飲酒は法律で禁止されているため、お申し込みいただけません。
※季節商品のため、なくなり次第販売終了となります。品切れの際はご容赦ください。



▲ピエール・フェロー社の畑

鈴木春恵

すずき はるえ/ジャーナリスト。さもの雑誌の編集者を経て、1998年からパリ在住。フランス、ヨーロッパの文化や人々の暮らしをテーマに、雑誌、ネットメディアをはじめ、YouTubeチャンネル(Paris Promenade)で発信している。

武田正彦

たけだ まさひこ/写真家。広告制作会社を経て、1985年に渡仏。86年北京美術館で映像展を開催。94年にアメリカにてADC(アートディレクターズクラブ)賞銀賞受賞。2000年フランス政府観光局主催フランスルポルタージュ大賞受賞。



フランスへの
アクセス

HND  **CDG**
HANEDA CHARLES DE GAULLE

東京(羽田)からパリ シャルル・ド・ゴール国際空港までJAL直行便が毎日運航。パリからレンヌはモンパルナス駅からTGVで約1時間半。シャルル・ド・ゴール国際空港からはTGVで約2時間半。

※最新の運航状況はJAL Webサイトをご確認ください。※掲載施設・店舗の営業状況は変更されていることもあります。お訪ねの際はあらかじめご確認ください。

INFORMATION

フランスへのご旅行は最新鋭の機材で！
エアバスA350-1000型機が運航中

11月9日(日)から東京(羽田)ーパリ線は毎日、長距離国際線の新たな主力機材であるエアバスA350-1000型機での運航となります。CO₂排出量のさらなる削減と騒音の低減などにより、よりサステナブルなフライトが実現。プライベート感溢れる上質な空間で、快適な空の旅をお楽しみください。